
紅魂骨董館

朝衣海美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅魂骨董館

【Nコード】

N5359I

【作者名】

朝衣海美

【あらすじ】

不思議な雰囲気漂う骨董屋、人形のように美しい少女、そこで売られているのは思い出の欠片、そして対価はその魂…。

第1話ペンダント

どこかの町にね、赤い屋根の古いお屋敷があって、そこはお店になってるんだって。

やだあ、怖い話い？

えへへ、それでね、木の扉を開けると、すごく綺麗な女の子がいて、こつこつ言ってる、

「あら、いらっしやい。何をお探し？」

それで、答えると、どんなものでも探して売ってくれるんだって。だけど、その代金っていうのがね・・・

「御代はあなたの、残りの寿命です」

「やだなあ、遅くなっちゃった・・・」

真っ暗な夜道を走る少女。白い半袖のセーラー服からちらちらと覗く肌は健康的に焼けていて、元気なスポーツ少女であろうことを予想させる。一つに束ねられた短めの髪の毛が、尻尾のようにぱたぱたと揺れている。

「たっただいま」

元気に家の中に飛び込んだ少女は靴を脱ぎ捨ててバタバタと二階に駆け上がると、着替えを持って下りてきた。

「今信一がお風呂入ってるわよ」

キッチンから母親の声が聞こえる。

「え、早く入りたかったのに」

「しょうがないでしょ、美穂、遅かったんだもの」

着替えをもったまま、食卓につく。テーブルの上には食事の用意が着々と進められていた。料理を作っている母を見つめ、待ち遠しい子供のようになににこにこしながら、ご飯を待っていると、兄が風呂

から出てきて、バスタオルで頭を拭きながら少女の頭を軽く小突いた。

「バカ美穂、おかえり」

意地悪そうに笑いながら、妹を見る。

「信兄ちゃん、ただいま」

ぷうっと頬を膨らませて兄を睨むように見上げる。小突かれた頭を軽く直しながら視線を母に戻す。

「父さんは？」

「今日は残業ですって」

「へえ、めずらしいね」

「京兄ちゃんは？」

「父さんが残業なんだから京にいたって残業だろ」

そういつて再び頭を小突く。むうっと兄を見上げる。京介と父は同じ会社で働いていた。大抵は一緒に仕事をして一緒に帰ってくる。

「二人とも今日は遅いらしいから、先に食べましょ」

「わあ、オムライス！」

ふんわり黄色いトロトロの卵にデミグラスソースがたっぷりかかったオムライスは、ゆらゆらと白い湯気といい匂いをふわふわと運んでいた。オムライスを3つ並べ終わると母も席について、3人はそろっていただきますを言うと、食べ始めた。

「お〜いし〜」

嬉しそうにオムライスをほお張る美穂を見て、兄はあゝあ、顔がとろけてるよ、と呟きながら自分もおいしそうに食べている。その二人の様子を嬉しそうに見ながら、3人の食事は進んでいった。

食事の済んだ頃、父と兄が帰ってきた。

「ただいまー」

「おかえりなさい」

帰ってきた2人を食卓にいた3人が出迎える。

「風呂入れるか？」

「ええ、入れますよ」

疲れた、というように父が風呂場に向かう。美穂は先に入っておけばよかったな、と思いながら、自分の部屋に上がっていった。

部屋に入るとドアを閉めて机の前にカバンを持って行き、椅子に座った。カバンをあけると中から手帳を出してプリクラの貼ってあるページを開く。

「周先輩・・・」

照れくさいような、嬉しいような、複雑な表情を浮かべながら微笑んでいる美穂の部屋のドアの前で、信一がドアノブに手を書けた状態で立っていた。その表情は暗く、思い悩んでいるかのように唇を噛み締めていたが、思い切ったように美穂の部屋のドアをあける。

「美穂、周はやめとけよ」

一言だけ、そう言うと言一は乱暴にドアを閉めて出て行った。その様子をきよとんと見つめていた美穂は、母に呼ばれて風呂に入るために下に下りていった。

「美穂ちゃん、どうしたの？元氣ないね？」

放課後の校庭は部活動で人が行き交っている。校舎の中はひんやりと静まっていた。屋上で2人きり、いつものお決まりのデートコースだった。美穂は、沈黙したまま、ぼんやりと信一のいる野球部を見つめていた。

「美穂ちゃん？」

「信兄ちゃんと周先輩って、仲良い？」

周は突然の質問に、間の抜けた表情をし、すぐに笑い出した。

「美穂ちゃんだって、それで僕と仲良くなったのに、なんでそんなこと聞くの？」

そう、周は信一と仲が良く中学の頃からの友達で、よく美穂の家に遊びに来ていた。高校に入って、美穂が周に告白し、2人は付き

合い始めたのだった。

「そうだよ、うん。なんでもないんだ。最近周先輩うちに来なくなつたから、聞いてみただけ」

可愛らしく笑う美穂に周もにっこりと笑って、優しく頭を撫でた。校庭からは、気づいているのか信一が屋上を苦しそうな表情で見上げていた。

その日の帰り道、美穂はいつもと違う道を通って帰ってみようという気になった。そうして歩いていると、赤い屋根の古い屋敷が現れた。その重そうな木の扉には、『紅魂店』と書かれた看板がぶら下がっていた。

「こんなところに、こんなお店、あつたっけ？」

不思議に思いながらも導かれるように店の中に入ってしまった。

「あら、いらっしやい。私はオーナーの紅。何をお探し？」

中に入ると、この屋敷にふさわしい、お嬢様といった風貌の、しかしすっかりとした意思の強さを感じさせる美しい少女が立っていて、小鳥の鳴くような声で美穂に尋ねてきた。

「あ、いえ、探してるものはなくて・・・あの、その、めずらしいお店だなんて思つて・・・」

少し赤くなりながらしどろもどろに答える美穂を見て、少女はクスツと笑う。

「そんなに慌てなくて大丈夫。だけど、貴方は何かを探しているのよ。だって、この店を見つけたんですもの」

不思議な言葉の使い方に、ぼんやりと酔っているかのような感覚を覚え、ふるふると頭を振る。周りを見回すとどうやら骨董品が置いてる店だということがわかった。その中に一つ、美穂の目を引くものがあった。

小さな玩具のペンダントだった。引き寄せられるようにそのペンダントを手に取る。そのペンダントは、幼い頃、信一が美穂に買ってあげたそれと、同じものだった。

「こんな、玩具も扱ってるんですね」

周りには高そうな骨董品が並ぶ中、そのペンダントも他の商品と変わらず丁寧に扱われていた。

「人の思い出が詰まったものは全て骨董品。値段や、それが何で出来ているかは関係ないの。このお店は、人の思い出を売っているのよ」 少女の話す言葉はなぜかとても魅惑的な響きを持っていた。

「それで、貴方は何を探しているの？」

美穂は自分が何を探しているのか、本当にわからなかった。何も答えられず困っていると、少女が近づいてきてペンダントの透明なプラスチックの宝石に触れた。

「ほら、見て御覧なさい、これは貴方よ」

少女に言われるままにその宝石の部分を見つめた。幼い日の思い出が、蘇る。

「にいちゃ、きれいねー」

そうだ、私は小さい頃、よく信兄ちゃんと一緒に縁日に行った。

私は、きらきら光る玩具のアクセサリーが大好きで、よく買ってもらったっけ。

「みほ、この前も買ってもらったじゃないか」

にいちゃんが呆れ顔で私を見てても、私はいちちゃんと一緒にいられて、それでうれしかったっけ。にいちゃんのシャツの裾がのびるくらいそれにつかまって、いつも追いかけてたんだよね。

「にいちゃ、これほしい」

泣きそうになる私を見てあの時はすごく焦ってた。そうそう、それで買ってくれたんだ、お小遣い全部つかって。

「ほら」

「あいがとお」

にこにこの私と手をつないで、神社の境内に座って、2人で縁日を眺めてたんだ。

「にいちゃ、あたち、にいちゃのおよめさんなってあげる」

そうそう、私がそういつて、にいちゃんも照れたように横を向いて・・・

「みほがおつきなくなってかわいくなったらな」

私達はお父さんとお母さんが働いてて、それで京兄ちゃんとは年が離れてて、なかなか大人がかまってくれなかった。だけど、2人でいればいつも楽しかった。

「なにか思い出した？」

隣で少女が微笑んだ。

「あの、これください」

「ええ、いいわよ」

につこりと笑うと少女はありがとうございました、と言った。

「あの、お金は・・・」

「いいのよ、それはもともと貴方のものだし」

「あの・・・私、うわさ、聞いてて・・・」

「御代は寿命って？ふふ、少なくとも貴方からは御代はいたただかないわ」

美穂が店を出ると、店の奥から信一が現れた。

「これでよかったのかしら？」

「ああ、ありがとう」

その言葉の本当に意味する所はなんなのか、微笑んでいる少女からは読み取ることが出来なかった。

家に帰ると美穂はすぐに信一の所に走った。乱暴にドアを開けると、信一はベッドに寝そべって雑誌を読んでいた。

「なんだよ、いきなり」

「信兄ちゃん、コレ見て！」

美穂がペンダントを見せると信一は驚いたように見つめた。

「それ、お前、なくしたって言ってたじゃねーか」

「うん、でも見つけたの！」

嬉しそうにはしゃぐ美穂を見て信一も嬉しそうに笑った。

「懐かしいな、やっと思い出してくれたんだな」

「え？」

次の瞬間、母の泣き声が聞こえた。美穂は急いで母の元へ向かった。

「お母さん、どうしたの？」

電話を落とし、床に崩れるように座り込んで泣いている母の肩を優しく抱いて美穂が問う。すると母は、美穂の顔を見て、泣きながら答えた。

「信一が、学校の屋上から落ちたって・・・即死だったって・・・」

美穂の頭の中がぐらりと揺れた。さっきまで二階で話していたのに、それなのにどういふことかわからなかった。

「お母さん・・・？信兄ちゃんなら二階で・・・」

「美穂、何言ってるの？信一はまだ帰ってきてないわ」

病院に着くと、確かに信一は病院のベッドに横たわっていた。そして、その傍らには警察に付き添われるようにして立っている周の姿があった。

「先輩、どうしてここに・・・」

美穂の問いには警察の人が代わりに答えた。

「彼は君のお兄さんと口論になって、もみ合っているうちにお兄さんが屋上から落ちてしまったといっているんだよ」

仲が良かったはずだ。なんで、そんなことになるのかわからなかった。美穂は周をどうして、という思いで見つめていた。

「僕は、悪くない。信一がいきなり殴りかかってきたんだ」
兄を非難する周の言葉に、美穂は昨日兄が言っていた言葉を思い出した。

「信兄ちゃん、私に、周はやめとけって言ったの。先輩、どうして信兄ちゃんがそんなことを言ったのか知ってるんでしょ？なんで、なんでこんな・・・」

それ以上言葉が続かなくなり、泣き崩れた。それを抱きしめるように母も泣いた。父や兄が駆けつけて、周は警察に連れて行かれた。

数日後、信一の葬式が行われ、たくさんの人が参列した。

その中に、あの店の少女がいた。少女は美穂に近づくと、少し話さないかと誘った。

美穂は黙ってうつむいたまま、少女についていった。家から少し離れた公園で少女は語り始めた。

「貴方のお兄さんはね、こうなることを知っていたのよ。それで私の所に来たの。妹を助きたい。だから頼む、ペンダントを探してくれって」

少女の言葉に驚いたように顔を上げると、美穂は少女の顔を見つめた。

「お兄さんは、貴方の恋人が二股をかけていることを知っていたの。それで、あの日、二股を辞めるように説得しようとした。貴方にも、忠告していたわね？だけど、貴方の恋人はきかなかつた。それどころか、お兄さんが貴方を兄妹として以上に愛していることを指摘して責めた。そして、屋上から・・・」

美穂は訳がわからなくなり、その場にしゃがみこんだ。少女はそんな美穂の頭を撫でて、去っていった。

信一が亡くなって3日目の朝、美穂は玄関を出ると、目の前に信

一が立っているのを見た。信一は微笑んでいて、美穂と目が合うと大きさに、大きく手を振って走って消えた。

明るい笑顔を残して……。美穂はそれを見てにっこりと笑った。

「よーし、今日もがんばるぞー！いつてきまあすー！」

元気な声に母は少し驚いたが、泣きはらした目でのっこり笑って娘の背中を見守った。

「ご来店、ありがとうございました」
少女の声が、空から響いた気がした。

第2話声

カランッ

「あら、いらっしやい、珍しいお客様ね」

ニヤー

「そう、でも貴方にはその子を助けるだけの力はないわ」

ウニヤー

「それではこれをあげるから、それを伝えて御覧なさい」

ボクがこの日暮横町3丁目に来たのは、つい2週間前のことだった。ボクの名前はクロ。日暮横町3丁目のお豆腐屋さんの真帆ちゃんがつけてくれた。

「お前、どこから来たの？ふふ、カワイーのネ」

「あら、また来たの？うちは豆腐屋だから、こんなものしかないわよ」

真帆ちゃんはそういって、お店のさつま揚げをくれた。それは久しぶりに食べる魚の味がした。

「いつも来てくれるのね、気に入ってくれたのかな？じゃあ、名前がないと不便ね。んー・・・綺麗な黒い毛してるからクロでいいよね」

ニコニコと元気に笑う真帆ちゃん。腹ペコで死にそうになっていたボクを助けてくれた真帆ちゃん。ボクは、日暮横町3丁目のお豆腐屋さんに住み着いた。

その真帆ちゃんから死臭がし始めた。3日くらい前からだったかな・・・。真帆ちゃんの首の後ろに黒い影が漂っていた。ボクはすぐ気がついたけど、真帆ちゃんや他の人間には見えていないようだった。

ニヤー

「クロ？どうしたの？危ないよ、どいてー」

いつもどおり、元気に仕事をしている真帆ちゃん。ボクは、真帆ちゃんの死臭が気になった。気になって、散歩中もずっと考えていた。そして気がついた。

真帆ちゃんのことを、いつも見ている怪しい男。なんだこいつは真帆ちゃんを見て、いつもいつも付けねらっている。ボクはその日から、その男を追いかけた。その男の家は日暮横丁3丁目のはずれにあつて、お店とそう離れてはいなかった。真帆ちゃんはこの男のことを知らないようだった。

「ねえ、クロ、最近どうしてあの人についていくの？なにかくれるの？」

「少だけ心配そうに真帆ちゃんがボクを撫でてくれる。」

ニヤー

ニヤー

ニヤー

「ニヤーじゃわかんないわ、ふふ」

真帆ちゃんは笑っている。いつも笑っている。

真帆ちゃんがこの男に殺されるって、ボクは知ってる。だけど、そんなことさせない。絶対させない。そう思っ歩いてるときだった。不思議な匂いにつられて少しだけあいている扉から、お店に入った。

女の人が、ボクに近づいてきた。

「あら、いらっしやい、珍しいお客様ね」

この人は、普通じゃない。ボクは思った。ボクは精一杯の思いでこの女の人に伝えた。

「そう、でも貴方にはその子を助けるだけの力はないわ」

女の人がそういうとボクはわかつているけど、なんとかしたいと思つた。店の中を見回してイロイロと見たけど、やっぱりボクにはわからなかった。どうすればいいのか、わからなかった。

ウニヤー

女の方は、黙って不思議な首輪を持ってきた。

「それではこれをあげるから、それを伝えて御覧なさい」
女の人が首輪を付けてくれた。そしてボクは店を出た。

真帆ちゃんのもとへと走る。夜になり、閉店した豆腐屋の前で一鳴きすると、真帆ちゃんがドアを開けてくれた。中に入って、いつもどおり、真帆ちゃんの部屋へ連れていかれる。

「どこ行つてたの? ・ ・ ・ あら、首輪してる。誰かにつけてもらったの?」

「マホチャン、アブナイヨ」

あれ?

「え・ ・ ・」

「マホチャン、アブナイ」

ボクの声?

「く、クロ、なの?」

真帆ちゃんはボクを離れた。怖がっているように見える。

ボクは床に下りると真帆ちゃんを見上げた。

「マホチャ・ ・ ・ アブナイ」

「な、なんで・ ・ ・ お、おとーさん!!」

「マツテ、マホチャン」

真帆ちゃんは慌てて下におりていつてしまった。ボクは、しゅんとしてそのまま動くことができなかった。しばらくすると真帆ちゃんのお父さんとお母さんがあがってきた。後ろに、真帆ちゃんもいる。

「オトーサン、オカーサン・ ・ ・ マホチャンガ、アブナイヨ」

「ね、ホラ、しゃべってる・ ・ ・」

「何言ってるんだ真帆、鳴いてるだけじゃないか」

え? おとーさんとおかーさんには普通に聞こえてる? ボクは首をかしげ、もう一度真帆ちゃんを見た。

「やあねえ真帆ったら、きつと夢でも見たのよ」

真帆ちゃんのおとーさんとおかーさんは笑いながら下に下りていつてしまった。真帆ちゃんは恐る恐るボクに近づいた。

「さつき、しゃべったよね・・・？」

「マホチャン、アブナイヨ」

真帆ちゃんはさつきより怖がつて居ないみたいだった。

「マホチャン、ボク、キライ？」

首をかしげて真帆ちゃんに聞きたいけど、真帆ちゃんからの返事は無い。

「マホチャン、ボク、コワイ？」

ビクツとして、真帆ちゃんがこっちを見る。

「・・・クロ、なんだよね？」

ニヤオー

普通に鳴いてみせる。真帆ちゃんは少しだけ安心したのか、ボクの頭を撫でてくれた。そして、ごめんねと呟いた。

「マホチャン、アブナイ。ボク、イツモミテタ。アノオトコ、アブナイ。マホチャン、コロサレル。ボク、イツモミテタ、ボク、シツテル」

真帆ちゃんは青くなった。そして、泣いた。

「何、それ・・・どういう・・・」

「ミツカマエカラ、マホチャン、シンダヒトトオナジニオイ、スル。マホチャン、コロサレル・・・ダカラボク、コエ、モラツタ。マホチャン、タスケル」

真帆ちゃんはまだ震えているようだった。そして、疲れたのか眠ってしまった。

朝、目が覚めると真帆ちゃんは学校に行く用意をした。そして学校へ行った。だけどボクはいつもより死臭が濃くなっていることに気がついて、学校へついて行った。中には入れてくれなかったけど、真帆ちゃんは震えているように見えた。

学校の帰り道、この日の真帆ちゃんは部活とかいうやつで、遅くなった。ボクは思った。今日だ・・・。

真帆ちゃんを守るようにしてボクは近くを歩いた。そして後からついてくる男の影を見ていた。

突然、男が走り出して、すぐに真帆ちゃんに追いついた。ボクは真帆ちゃんとも男の間にジャンプして、男の顔を引つかいた。男は小さく呻いたけど、ボクを睨んだまま真帆ちゃんの目の前に立った。

「や、なに・・・クロ・・・」

真帆ちゃんは震えていた。目からはナミダが溢れていた。

「こおの、クソネコツ！」

フギヤアアアアアアアア

ボクは、精一杯の力を振り絞って飛び掛る男の首や顔を引つかいた。

「キヤアアアアアアアアアアアアアア！！！」

真帆ちゃんが叫んだ。男は包丁を持ったまま、痛がって倒れている。真帆ちゃんの声に、近所の人たちが顔を出す。周りに人が集まり、だれかが警察を呼んだらしい。男は逃げようとした。真帆ちゃんは近所の人に支えられている。

警察が来て、男は逮捕された。真帆ちゃんは、無事だ。

「ク、クロ・・・クロ！」

どうしたの？真帆ちゃん、助かったのに、なんで泣いてるの？

ニヤー

あれ？しゃべれない・・・あ、そっかさつき首輪、切られちゃったんだ。もう、しゃべれないんだ。

ニヤー

「クロツッ！」

真帆ちゃんは制服を血だらけにしてボクを抱きしめてくれた。

ああ、気持ちいいなあ。よかった、真帆ちゃんから死臭が消える。

ボク、なんだか眠いや。だから、真帆ちゃん、起きたらまたいっぱい撫でてくれるかなあ？

第3話香水

「ねえ、あの人の心が欲しいの」

「残念だけど、ココには置いていないわ」

クスクスと笑う少女の影に立つ女性は、少女に向かって怒鳴る。

それは、人の声ではないかのように、こう、喚き散らす・・・。

「ここはなんでも売ってるって聞いたわ！私の命なんていらないわ！なんでも売ってるんじゃないの！？友達が言ってたわ！ねえ！・・・」

えんえんと続くそれはしかし、店の外に出てしまえば聞こえない。散々喚き散らすとその場に座り込んで、顔を覆い、泣き出す。少女は誘惑の笑みを漏らす。

「では、これを売ってあげる。一つだけ注意なさい。これは男がつけてはいけない秘薬。それだけは守ってね」

クスクスと笑いながら、香水を差し出す。少女の笑みが意味するものは、本当のところはこの女性にはどうでもよかった。

ただ、あの人の心がほしい

バタバタと走る足音。外だというのに、いやに響くその足音は、とある男の家へと向かっていた。

チャイムをな鳴らすと、がちやりとドアが開いた。そこにはよく見知った男が立っている。

「なんだよ、また来たのかよ。もうお前とは終わったんだよ」

嘲笑うような表情で吐き捨てる男。女はにこりと笑う。さっきまでの形相はどこへやら、鬼のような形相で喚き、走ってきた女が、天使のように微笑んだ。

「あ、あの、話を、聞いてほしくて」

「俺はもうお前と話することなんかはないよ」

そついうと男はドアを閉めた。

ドアの前にたたずむ女は、さっき買った香水を首筋にひと吹きし

た。可愛らしい萼の形を模したボトルから、甘い香りを想像していたが、香りはしなかった。女は目を見開いた。そしてチツと舌打ちし、右手の親指の爪をガリツと噛んだ。

騙された

そう思ったが、そのまま再びチャイムを鳴らす。

「いい加減にしてくれ!!」

ドアを開け、顔を出して怒鳴る男。すぐにドアを閉めようとするが、その動きが止まる。そして、完全にドアを開けると、にこやかに笑った。

「お、俺、どうかしてんだ。お前とは終わったなんて・・・」
そういった男の顔をまじまじと見て、ポケットの香水を握り締める。

「上がれよ、泊ってくんだろ？」

戻ってきてくれた

女はそう確信して男の家に入った。

女はそうやって幸せを手に入れた。毎日欠かさず香水をつけ、男と一緒に暮らし、結婚した。

2年たったある日、しまつてあるはずの香水がテーブルの上に置いてあった。不思議に思い男を見ると、男は何も変わらず普通にしている。きつと自分が片付け忘れたのだろう、と思い、いつもの場所にしまった。そのときふと、少女が言っていたことを思い出した。

男がつけてはならない秘薬

どういう意味だったのだろうかと考える間もなく、そのことは忘れた。

そして数日後、やはりふと思い出した女は、試してみたくなってしまう。少女のいっつけを破り、男の寝てる間に、男の首筋に香水を吹きかけてしまった。

変わった様子はなく、ただの脅かしだったのかとその日は眠った。

更に数日後、男の体に異変が現れた。体中に黒いあざができ、それがどうもなにかに巻きつかれたようなあざだった。蛇のような、細長いものが男の体中をあざが着くほどに締め付けているような、そんなあざだった。

医者に行っても原因はわからず、ただ安静にするようにと言われるばかりだった。

日に日にひどくなるあざは、ついに体中を埋め尽くした。その瞬間、男は発狂し、狂い死んでしまった。まるで、香水を買ったときの女のように泣き喚き、人の声とはつかない声で叫び、そしてふつんと糸が途切れたように死んでしまった。

女は悲しんだ。そして、香水のことを思い出した。自分があの時男に香水をかけてしまったから・・・と思うようになった。いてもたってもいられなくなった女は、あの日と同じ形相である、香水の少女の店に走った。

パンツと乱暴に扉が開けられた。あの日と変わらぬ姿のままの少女が、女に微笑みを向けていた。

「幸せな生活は出来たかしら？」

「夫が、狂って死んでしまったわ」

少女は変わらずクスクスと笑っている。

「あなたのせいよ！あなたがこんなものを私に・・・」

「だから言ったでしょう？男に使ってはいけない秘薬だって」

あの日と同じ、鬼のような形相で女は少女をにらんだ。そして、襲いかかろうと飛び掛ってきた。少女はあっさりとその手につかまえる。しかし動揺するでもない、微笑みは絶やさない。

「殺してやる」

小さく呻いた女は細い首を持つ手に力を込める。

「貴方の望んだことよ」

少女は息をしていない。目も開いていない。心臓も・・・。

荒く息をついで、手を離す。ぱたりと少女が倒れ、我に返る。

こ、殺してしまった・・・！！

女は逃げた。店の外へと飛び出した瞬間、目の前を通った車、スローモーションで道路に叩きつけられる女の体。

ぐにやりとしたただの物体になっても尚滑り続け、店から10メートルは離れているだろうか、歩道にひっかかり、動きを止めた。

カラント

「私の店の品を悪用しようとするからいけないのよ」

首に女のつけた痕はない。平然とした顔で女の死体を見つめ、クスクスと笑いながら、扉を閉め、奥へと消える少女。

「確かに、御代をいただきました」

その正体を知る者は、誰もいない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5359i/>

紅魂骨董館

2010年10月10日02時45分発行